馬誌

器具部

四十二

和書門
類 一七三九五
號
函 一三〇
架 六二
冊

武備兵法

内閣文庫
和書
類 一七三九五
號
冊 六二
函 五四
架 二一

内閣文庫
番號 和 17395
冊數 62 (43)
函號 154 455

国立公文書館
National Archives of Japan

馬誌卷之四十二目録

器具部

障泥

内閣文庫圖書

淺草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

馬誌巻之四十二

器具部

障泥

一障泥和名阿不利唐韻云〻韓。障泥鞍飾也。西京雜記云〻玫瑰鞍以緑地錦為蔽泥。今按即障泥也後稍以熊羆皮為之。和名抄

一阿不利と訓するこゝろはふる〻とゝてあを
るものあれも名付しものあるへし毛皮ハ

公界に出さるものなり虎豹の皮なり
も大名ハ此を好て用ゆ（らるす 安都馬具佐

一障泥俗にあをりと或ハあほりと書ハ非
なりなりといふを以て其理を考ふ（
字音相通してその義ハ一なり源氏浮舟
にあをりをしいてとあり 假名字例

一上古ハ障泥と書しかども中古以来ハ字
を上下にして泥障と書り 安都馬具佐

一障泥の事倭名抄に唐韻の韓ハ障泥。鞍
の飾なりといふを引て阿不利とよむ又西京
雑記に見ゆる玫瑰鞍緑地綿を以て蔽泥
とす後にや熊羆皮を以てこれをつくると
いふ事を引て蔽泥ハ障泥なりとも注しなり
延喜式に凡そ羆皮障泥ハ五位以上これを
着る事をゆるすなりと見る また金覆輪
の障泥或ハ黄絲の組を以てこれを押ゆ
御幸及び春日詣等の時に華族の人これ
をかけらる行幸の日地下の前驅ハ障泥をさ

す擬政乗用の馬にもされすなとも侍る
あり（玉葉）又常の時の如き障泥を用ひすと
も又遠所の儀に障泥さすへき事い往来の
うち表袴奴袴おとの馬の汗にけうもん
するをいとゝゆへあり（と）ゝ見えたり武士の
騎馬出立といゝにも泥障いさすへからす
但しいかゝみすりい用ひて苦しからすと
いゝるありおの障泥といい毛皮をいひあ
みすりといい播磨草ゆまる作りをいゝよ

注したれい障泥といい熊羆等の皮にて作も
るにて鎧磨といひしいい今の世み用ふる板
障泥といゝ物の類にやとおもふる甲冑を
帯する時も大やういい馬の障泥をいさゝさ
あり義家朝臣の像又古き繪ともに畫き
しとゝろも障泥さしたるい見えすさき
とまゝ源平盛衰記にい熊皮の障泥さし
たりおといゝるゝ見えたり（本朝軍器考）

一 障泥い延喜式に御鞍又女鞍の具にいその

名見えたるも支馬の具にハ見えずして
物具抄の唐鞍移鞍の具にありとも見えず
和鞍のところにハ泥障と見えたり是も切付
の時ハこれを用ひ大滑のときにハこれを
用ひずとありこの大滑といふものハ今普通
ハ用ふる肌付の大きなるものなるべけれど後
世にあゝみすりといふものハ大滑に倣ひ
て造り出したるものなるべし泥障の製
古く見えしハ熊皮。水豹。金覆輪。白覆輪
等見えたり武士の兵具を帯するハ表立ひ
ときハすくて泥障をさゝるにや古画にも
絶て見えずして大滑といふものハ
さたり古の記せしものにも治承年中に
宇治川の合戦のとき筒井淨妙ハ熊皮
の障泥をさしたりとありこの外にハ聞え
ずしかも鐙摺といふことを考ふるに泥障ハ
本大滑にすりて造り出したるを今ハ板
泥障ハ亦鐙摺にあらひて出来しもの

にや此障泥を鞍の四方に結ひ付る緒を延喜式にハ緋革を以てせ〳〵所少く見え〳〵甚後の古き畫にも又記せるものにも泥障の緒といふすハ聞えさりしう夫より後代みなりてハ殊の外太く長き組の絲を用ゆるようにハなりし　軍器考補正

一延喜彈正臺式ハ凡羆皮障泥者。參議以上聽着用之　○同左右馬寮式ハ造御鞍一具料。障泥皮數隨大小。造女鞍一具料。障泥熊皮

一張長六尺以上並請内藏

按するに往古よりこれあり但し行幸啓行等の供奉嚴重の式及ひ主馬等にハこれを用ひす御幸の供奉以下にハらまを用ゆ式目抄に大和鞍五位以上用之四位已上豹皮五位虎皮行幸啓行時壺鐙大滑御幸之時者舌長鐙泥障と見ゆ此外行幸供奉の馬具注文に何もも障泥これなし唐鞍移鞍等にハ元より

障泥は是あり〜但し〜齋院御禊次第
使。移鞍に障泥を指は別儀あり○衛府
装束抄は賀茂祭に斎院はまらせ
給へとき次第使の馬允といひて左右に一人
つゝ乘るあり斯移に去やくまの障泥をさし
て乘あり移に有りさすことゝ思これ
なりあり左筆をは去るゝに閉つけ
ることをさゝふちてさしすあり五位已上熊
毛障泥はもと治平の用馬に遠路をさせ
表袴さしぬきの汗に穢まんをいと
へゆへなり摂政殿の御乘用の御馬に
は泥障をさし除いぬとあり武士走馬ま
は用ひさるゝよしの説信し難し今は
摂家方乘用には常時の馬具にて置させ
らるゝ晴のとき又は或は家格によりて考へ
あるべし　安都馬具佐

一障泥　赤地唐錦

寛永元信範記

一障泥

如恒用舌　　以上飾馬類句一覽

一東鑑文治五年六月の條に障泥。白覆輪。建久五年條に水豹毛障泥○裝束抄に摂政乘用に障泥を指ざるよし光明峯寺記に見えたりと見ゆ

按するに一說に障泥は後世のものにして古代は鐙磨といふものありと無稽の言あり延喜式。江次第に出たれど其前代より

寛元四十廿四陽龍記

あるあらん　本朝武林原始

一熊皮は障泥は古制は五位以上の人用ゆるなり六位以下の人は用ひざるなりまたや無位の人にをいてをや　田芳漫録

一古き武者に障泥指したるはあり昔は無位無官の人は障泥指するをゆるさず障泥は泥をさけゆるされて乘きる人の裝束をけかすまきたるあるそあるあれ諸禮集に騎馬のときむりぎきを

たくあらざあるいさすまきなり大将
の馬をもあるいさすまきと尽さり　愚得随筆
一障泥の事ハ區々に説ひれも和名抄み
泥を障るとあるに依てこれを考るに此
物いもと雨雪の日に道途の泥を馬足に蹴
立て乗る衣服を汚すを障んなめの具
あり然るに是を常に用ひて便利の為と
もなり又かさりとするにいあれり然き
な時天の日にい無用の具あり武家にい

軍陣又騎射にい必す障泥をさゝるあり
殊に川渡あるにい障泥に水去とむゆへ
用ゆまきさなり大将の行軍道路の間ハ
壮觀のために虎豹あるの障泥を用ゆる
事もあるあるへ　安齋漫筆
一用害記ゆ云く乗馬にあるを掛るを
い略儀あり切付ゆも小あるといふ是も
同然あり
貞丈云く切付ゆも小あるといふと

ハ切付を大み作りて小あゝりと名付し
ある〳〵又云くあゝりハと雨ふる日
ハ泥さね上りて裝束をけうすゆゑ甚
泥をさゝんうためにしたるゆゑ
泥障とも書あり和名抄にハ障泥と
あり是を正とす〳〵右にいへるごとく
泥を障るための具あるゆゑ晴天
みハ用ひす然れとも昔より晴天の日に
も馬の飾りに用ひ来りしあり馬の
乗方にハ利用おきものあるゆゑ流鏑馬。
笠うけ。犬追物。軍陣のときおよび都て
馬上ハ働をするにハあゝりをさぬす
あり古き物語の書おとに大将の出立に
熊の皮のあゝりさしたるおといふも
見えられとも是ハたまゝのうなり
又ハ故實作法ぬ心付すして文章の花
に書たるも志ゝまず乗方にハ入用お
きものあり今世ハ馬具ハ故實を知

なる人もあけまく常にあるをさ
責馬の時にもあるをさすに成
なり馬を乗時かくを入るにもあり
を隔てかくに成入るゆへ木馬の稽古
よもきひしく強くかくをいれ事
なり是今世常にあるをさす世の
中の乗方あるあるさぬ時にき
ひしく強くかくを入るさる馬の骨
を強く痛め破りて害あるへしあるを

さしたる時とさしぬ時とにかくを入る
にも心得あるへきるあるあるさぬ
時は少し強くかくを入ても馬の骨に
答る事は強うるへし心得あるへ
きるなり　軍用記

一毛あるは寒暑に乗よく駻のつよ
き馬はよくおめし障泥は雨によく
陣中利用多し心得ありて用ゆへ

一　一已持用集

一障泥ハ何ぞも毛あつよし鼾のよき馬あもよし冬陣に一入よきなり　竹中百箇条

一障泥ハ毛皮を本式とすれあめ皮ハそ丸く作りなるハ鐙すりといふ　軍用記

一毛あふりハ足あつよく寒天に足あたゝかすすきてもひそるるあり併し水をふくみて重くなりかくをといきくしてきかたしまゝ用ひすしてをけゝ兎角毛ぬけやすし　安都馬具佐

一障泥ハ毛を用ふへし鐙受け又表皮の為めも宜し或ハ二重草ハ中を開け置き陣中の水桶と飼桶を兼ぬへしと云陣中あてハ器財一つも事少きに益ひれを尤珍る〳〵級ハ一筋四尺つあり　武學拾粹

一長陣のときし毛あつハ悪きものなり雨にぬれハ用ゐ立すハ大閤古代のときハ尻掛面掛ふさも付きさすハ

兎角武道具ハ強み然る（きよ）宗輝板も仰らきひよ　聞見集

一　三議一統に障泥ハさす（らす）但し
あゝみすりハ苦しからす障泥ハ毛
皮の事あり播磨皮のまゝ作りあるハ
苦しからす

按するに近世の板障泥ハあゝみすりと
りゝすのに近し毛皮の障泥ハ禁
制にて板障泥ハせしと見えたり今
ハ上下の差別なく障泥をさするにハ
あらぬ　愚得隨筆

一　板障泥とハ草の障泥なりかく
音高くきゝもよく強くして陣中にて
色ゝの兼用をなすぬまて日にあたゝ
ひそるなり利用を能ゝ吟味して用ゆ
べし

一　板障泥の下の両すみにあゝをあけて
をく事陣中にて用をなす事多し

一同しき裏に八寸ほど草にて裏を付る但し中通りより表の草へ縫付
へしさるけまそ物を入れたる時ふく
きて悪しとあり此ハ皆又草鞋おとを
入へきなめあり然きともふくれて馬の腹
にあたりてハ不可あり吟味して用ゆへし
以上安都馬具佐

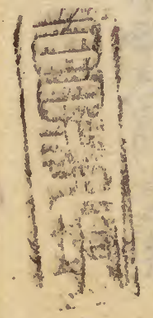
一外ハかめしまそも毛皮にても内の方に
裏を付上の方を明て置或ハたみにても
皆まそも夫へ入るなり又備ハこうもせに
して置あり 武道勇術集

一障泥ハ袋障泥よろし飼料と又何に
ても入る物を入るなり裏表とも
草あて格元置けハ水汲にもあるなり且
障泥ハ小形あるうよろし紐ハ房付よろ
しかるす模様ハ凡布にある品定紋おと
よしあくともすむ事あり障泥ハ軍
中にハ掛ぬもよしとい 騎士用本

一川越障泥ハ紐を腹帯へ結付る両胯ハ
膁の上へあるやうに證ハ下にあるやうに
すべし膁ハ陸泥の胯へ踏込あり腹帯
へ緒結ひ付るハ胯の上へまねあけまき
こと有り十町二十町の川あハ川越の障
泥入すとも浮沓をうしなそも浮ものあり
一里ともある川幅のときハ用るあり 軍用心得之記
一障泥ハ去ふいてやうりうあるを可とす切
付も去ふいてゆるまさるを用ゆるあり 武馬必用

一障泥緒の事一筋四尺つゝ四筋あり首
を取り緒まそ口より引通し付るためあり
軍用心得之記
一障泥二つを一刺とし緒ハ組絲あり色ハ
好み次第あり但し紫ハ遠慮すべし
總あるあり緒あきあり四筋を一刺分と
し 安都馬具佐
一障泥いとあをみかを細工いしいるハ
くるしからすハ并みむらさきを綱きぬ

一　波部又郎ノ祖母ハ羽州米澤の上杉家人にてありし極老にて又郎ノ所に養育せらるゝ或ときゝ語りき其母の若きとき上杉の家中にて大身ハ格別障泥大かゝハざるとてありしとゝ　愚得隨筆



国立公文書館
National Archives of Japan